

Infinity

久光真央

和泉 姫香（元カリスマモデル）
岡部 小春（マネージャー）
吉田 洋弥（カメラマン）

松山 美桜（ホスピス病棟の患者）
瀬尾 柁平（ホスピス病棟の患者）
高見 柚子（ホスピス病棟の患者）
戸田 和歌（ホスピス病棟の患者）
小川 陽介（ホスピス病棟の患者）

青山 佳吾（ホスピス病棟の医者）
飯田 良寛（研修医）
横田 佐保（看護師）
原川 真知（ホスピス病棟のボランティア）

大塚 百合（院長）
木部 成美（看護師・婦長）

大塚 水恵（一般病棟の患者・院長の娘）

宮代 さや（子供ホスピスの患者）
大里 日和（子供ホスピスの患者）
栗橋 一佳（子供ホスピスの患者）

松山 武史（美桜の夫）

戸田 秋美（和歌の母）

吉川 直綺（柁平の後輩）

白岡 結衣（陽介の仕事仲間）

川島 初音（柚子の友人）

青山 汐里（さまよう者・青山の妻）

【開場】

15分前に前説。
5分前に簡単なアナウンス。
MOが入る。

スケッチブックを持った子供たちが現れて、
絵を描き始める。
描いた絵を破りとり、紙飛行機を折る。

上手より美桜が現れる。
中央ベンチに座る。
上手より車椅子にのって、水恵が現れる。

鐘の音(開演キュー)

【プロローグ】

音楽。

中央から汐里がジヨウロを持って現れる。
汐里、眩しそうに空を見上げ、花壇に向かう。

子供たち、紙飛行機を飛ばす。

美桜 「おはよう」
汐里 「おはよう」
水恵 「おはよう」
日和 「ね、お話して」
一佳 「お話して」
汐里 「お話？」
さや 「お話」

劇場奥扉から、姫香が現れる。
汐里が姫香を見て微笑む。

美桜

「昔々。あるところに。
一人の少女が住んでいました。
少女はいつも空っぽの手のひらを見つけていました。
空っぽの手のひらは、ますます少女を空っぽにさせていました。
昔々。別のあるところに。
鏡を見るのが大嫌いな少女が住んでいました。
鏡の精が言うのです。」

私なんか。私なんか。

少女たちは乾いた笑顔で呟きました」

姫香、周りを見渡す。

水恵 「森の中には、ひっそりと小人たちが住んでいました」

日和 「小人たちは自由でした」

一佳 「毎日、楽しそうに暮らしていました」

美桜 「少女たちの笑顔が仮面のようにはりついた頃に」

汐里 「少女は。であったのです。

昔々。あるところまで

強い風の音。

水恵、子供たち、上手にはけていく。

汐里、美桜、丘の上にはけていく。

姫香、紙飛行機を手取る。

姫香 「夢……？」

姫香、目が覚めたように辺りを見渡す。

【一場】(中庭)

劇場奥扉から、カメラをもった洋弥が現れる。

洋弥 「姫ちゃん」

姫香 「え？ああ、洋弥」

洋弥 「おはよう」

姫香 「おはよう」

洋弥 「どうかした？」

姫香 「なんでもない」

洋弥 「寝ほけた顔して。小春に怒られるよ」

劇場奥扉から、荷物を持った小春が走りこんでくる。

小春 「おはよー、ごめんごめん、遅れちゃって。

やー凄いわね、この病院。ほんとに病院？」

姫香 「病院なんですよ」

小春 「やだ、姫香、なにその顔！」

「ほら」

小春 「目、はれてるじゃないの。ちょっと顔、しっかりしてよ、顔〜」
姫香 「朝からうるさいなあ」

小春 「だって、あんた、今の状況、わかってんの？（メイクを直させる）
超久しぶりにお仕事きたんだから。自覚してよー」

姫香 「仕事っていったって、」

洋弥 「立派な仕事場だ」

姫香 「私、モデルだけどっ」

洋弥 「売れてないけどっ」

姫香 「お互い様ですけどっ」

小春 「だから、これは私達にとって大チャンスなんだから、しっかりして
私たちっ」

小春 「もちろん私もよー！」

姫香 「知ってるっうちの事務所の中で、私、一番仕事出来ないの。

洋弥 「お荷物って言われてんの」

姫香 「知ってる」

洋弥 「しょうがないよ、小春ちゃん、元モデルだったんだから」

小春 「でも今はマネージャーだもの！

私、」こらで、実績を残したいの。敏腕とか言われてみたいのよ。
あんたたちもよ！ 姫香、あんたなんか、

元カリスマモデルとか言われてて、どうよ？ 嬉しいっ

よみがえるのよー！ もう一度、あの光の中へ！

「はいはい」

小春 「はいはー回ー！」

食堂扉から、エプロン姿の原川が現れる。

原川 「おはようございますっ」

小春 「あ、原川さん、おはようございますー！」

原川 「にぎやかですねっ」

小春 「やだ、」病院でした、すみません」

原川 「いえいえ、大丈夫ですよ」

小春 「（2人に）こちら、この病院のボランティアの原川さん」

原川 「原川です。この度はありがとうございます」

小春 「」ちーそありがどうっ！ ございますー！ あ、紹介します、これが」

原川 「（ほうほうに声をかける感じで）

みなさーん、モデルさんたち、いらっしやいましたよっ」

食堂扉から看護師の横田が現れる。

横田 「わー、元カリスマだ！ 先生、先生〜！」

青山 「（声）えー？ 元カリスマ〜？」

横田

「すーい、本物ですかー？」

原川

「本物ですよ、ほら、」挨拶して

横田

「どうも、横田です、看護師です、どうも。先生、早く来て

青山

「(食堂扉から現れる)いやーどうもすみません、

朝「はん食へてまして。」

小春

「はじめまして、」の専任医師やっています、青山です」

「はじめまして、」の度はありがとつ「ございます。」

うちの事務所のモデルの姫香と、

専属カメラマンの洋弥です。

私、マネージャーの岡部小春です。よろしくお願いします」

原川

「やだ、小春さん、そんなかし」まっちゃんて

小春

「え」

横田

「(姫香に)足り、足、ながいですね、見て、先生」

姫香

「え、ちよっと」

原川

「(洋弥に)あなたは？モデルやんないのっ」

洋弥

「や、僕は」

下手から研修医の飯田が入ってくる。

飯田

「青山先生！」

青山

「あ、ちよっとよかった、これ研修医の飯田くんです」

飯田

「どうも。飯田です。先生、ちよっと」

青山

「なんだよ、もう、飯田くん、いつも余裕ないんだもん、

直した方がいいよ、これから」

飯田が青山に何かを伝える。横田と原川にも伝わる。

4人、急に真面目な顔になって、顔を見合わせる。

小春

「あの」

青山

「えー、ではではそれでは、みなさん、どうぞよろしくお願いします。

期待しています…あっー！」

姫香

「えっ」

青山

「(ポケットから、りんごをだし、姫香に渡す)

「これ、どうぞ」

飯田

「ありがとうございます」

青山

「先生、早く」

「じゃ、また。楽しみにしていますからね」

青山、飯田、横田、足早に下手にはけていく。

あっけにとられる3人。

原川

「ほんと、楽しみにしてるとですよ、ファッションショー」

姫香

「ファッションショー？」

原川

「存知なかったですか？」

小春

「まだ、ちゃんと説明してないんですよ」

原川

「あ、ですよ、ね、さっくくりとしか、お話してませんでしたもんね」

小春

「はいーなので、早速、打ち合わせ、よろしいでしょうか」

原川

「それが、ちょっと急に立て込んでしまっ……」

「少しお待ちいただいてもよろしいですか？」

「実行委員のみんなをよこしますんで」

小春

「はあ、実行委員」

原川

「これ、一応、このパンフです」

小春

「ありがとうございます」

原川

「では、またあとで。よろしくお願いします」

原川、足早に下手にはけていく。

鐘の音。

汐里がジヨウロを持って現れる。花壇に水をあげはじめる。

さやと日和と一佳も現れて、遊び始める。

りんごを見つめる姫香。

洋弥

「ファッションショーって？」

小春

「この患者さんたちの今度のイベントだね、」

姫香

「ファッションショーをやりたいうって話が出たんだって」

洋弥

「イベント？」

小春

「患者さんたちの？」

「で、せつかくだから、プロフェッショナルなモデルを呼んで、」

「一緒にやりたいって」とになって」

洋弥

「病院でイベントとかってあるんだ」

小春

「この病院は、記念に残ることをやるのが多いみたいね」

姫香

「この病院？」

小春

「ホスピスよ。あれ？言ってなかった？」

姫香

「言っていない」

洋弥

「ホスピスって、末期ガンの患者さんとかの(ちらっと周りを見る)」

小春

「うん」

姫香

「……あたたかく迎える場所……」

姫香が見ている。パンフを、子供たちが取り上げる。

姫香

「あー」

さや

「ホスピス五大原則。読みますー！」

日和

「お願いします」

一佳 「お願いします」

一佳 「患者さんをひとりの人格者としてみることに」

一佳 「病名でみないで、人間としてみるってことですよ」

一佳 「苦しみをやわらげる」

日和 「痛みのコントロールです」

一佳 「不適当な治療はしない」

一佳 「役に立たない検査はしないってこと」

一佳 「家族のケア、悲しみを支える」

日和 「愛する人を見送ったあとも、悲しんでる人の支えになれるように」

一佳 「チームワークで動く」

一佳 「全てはチーム医療。その患者さんが必要と想う人は全てチームですよ」

一佳 「以上！」

一佳 「以上！」

一佳 「お返しします」

一佳 さやが笑って、パンフレットを姫香に返す。

一佳 目の前で笑っている子供たちに困惑する3人。

一佳 「えっと」

一佳 「えーっと……」

一佳 丘の上(レク室)から和歌と柚子が笑ってみている。

一佳 「パンフレットに書いてある通りよ。」

一佳 「ここは命の最期をあたく迎える場所」

一佳 「もともとホスピスっていうのが暖かく迎えるって意味なんです。」

一佳 「疲れたら休む。のどが乾いたら水をのむ。」

一佳 「お腹がすいたらここ飯を食べる。」

一佳 「好きなことをして、大切な人を思い思われ。最期を迎えるの」

一佳 「3人、言葉をつまらせる。いつの間にか陽介と柗平がいる。」

柗平 「ダメだよ、そんな説明じゃ。困ってるじゃないか」

柗平 「困ってますよね。じゃあ、ちよっといいですか、」

柗平 「ここに座ってください」

柗平 「えーと、あのその」

柗平 「今、イベントの時の挨拶の練習してたんです。」

柗平 「ちよっと見てもええですか？」

柗平 「あ、いいね、見てもええおっ」

柗平 みんなで3人を強引に座らせて、立ち位置につく。

柘平

「じゃあ、やりますね(メモを見ながら)えー、よろしくお願いします。

みなさま、本日はようこそいらっしゃいました。まず、こちらの病院の説明をさせていただきます。

こちら一般病棟です、そしてこちらが緩和病棟、いわゆるホスピスになっています」

陽介

「ホスピスというのは、

柘平

末期ガンの患者さんたちをケアする場所です」

「ホスピスに入ってくる患者さんっていうのは、

みなさん、死を受け入れて、

残りの一日一日を豊かに過ごす方が多いです。

いわゆるクオリティオブライフ。

生きるという命の質、それを大事にしています」

陽介

「チーム医療が基本なんで、医師や看護師、

ケアワーカーやソーシャルワーカー、

カウンセラーやボランティアの方々とか協力しあって、患者さんの

ケアにあたります」

和歌

「こちらの病棟では年に数回、患者の中から実行委員を募って

イベントをやっています。

今回はこどもホスピスとの合同イベントになります。

(子供たちを並ばせる)

あ、ほんとは、ここに、もう一人、実行委員がいて、

今日はちょっと体調悪いみたいなんで、はい、美桜さんの

挨拶ありました、はい」

柘子

「私達が今回の実行委員をつとめます」

陽介

「小川陽介です。ここに来る前は、遊園地で働いてました」

和歌

「戸田和歌です。私は歌をやっていました」

柘子

「高見柘子です。ダンスやっていました」

柘平

「瀬尾柘平です。アクションやっていました」

さや

「宮代さやです!」

一佳

「栗橋一佳です!」

日和

「大里日和です!」

陽介

「みんなで今日を迎えられたこと、嬉しく思います!」

柘平

「全員で一丸となって頑張ります!」

みんなでお辞儀する。

3人、顔を見合わせる。

洋弥

「みなさん・その、あの、患者さんなんですよね」

柘子

「だから、ここにいらっしゃるじゃない」

洋弥

「いや、元氣ってどうか、その、あの、なんていうか」

和歌

「それが、痛みのコントロール」

姫香

「はあ…」

小春

「実行委員、患者さんがやるんですね」

柘平

「ええ、毎回、やりたいことをみんな決めて、」

和歌

「楽しみなの。ファッションショー、どんな風になるのかなって」

柚子

「しかも元カリスマモデルと一緒にだなんて凄いよねー」

姫香

「…私達で大丈夫なんですか？」

陽介

「頼りにします」

日和

「ね、私達もちゃんとショーにだしてね」

一佳

「たくさん練習してるんだから」

さや

「私達、子供ホス。」実行委員も会議には出ますから」

柘平

「本番当日までよろしくお願いしますー」

姫香

「正直、みなさん、元気でびっくりしました」

全員、顔を見合わせ、また並ぶ。

和歌

「…朝起きたら。」

今日一日、どう生きたいかっていつも想います。

明日は夢で。昨日も夢。今日が現実。

だから、今日を生きるんです」

全員、笑いあう。

汐里、微笑む。

陽介

「じゃ、案内しましょうか。会議はレクレーションルームでやるんです」

洋弥

「写真撮ってもいいですか」

柚子

「もちろん！たくさん撮ってください」

姫香、小春を残し、全員レクレーションルームにはけていく。

上手から、車椅子にのった、水恵。

楽しそうなみんなの後ろ姿を見つめる。

姫香、小春、顔を見合わせる。

水恵

「あの…」

姫香

「はい」

水恵

「ファッションショーをやるんですか？」

小春

「あ、はいはい」

水恵

「それって、うちの一般病棟からも参加できるんでしょうか」

上手から木部師長がやってくる。

小春 「えーと、よくわかんないんですけど、聞いてみましょうか？」

水恵 「いえ、あの」

木部 「水恵さん」

水恵 「……木部さん」

木部 「戻りましょうか」

水恵 「……私」

木部 「院長が心配しますよ」

水恵 「今日は気分が良かったから」

木部 「そう言っって一日に何回来れば気が済むんですか」

木部、車椅子を押そうとする。

下手より飯田がやってくる。

飯田 「あ、水恵さん！来てたんですか？」

飯田、水恵に駆け寄り、触ろうとして木部に睨まれる。

飯田 「あ、木部師長も来てましたか……」

木部 「今、戻るところですが」

飯田 「水恵さん、どうかされたんですか？」

木部 「いえ、大丈夫です」

小春 「あの、飯田先生でしたっけ？」

飯田 「はい、あ、先程は失礼しました。」

青山先生たち、そろそろまたお話できるかと思えます

小春 「あの、「この方」

飯田 「水恵さんです」

小春 「さっきのイベントに参加されたいそうなんですけど」

飯田 「えっ？」「のっえっ？えっ？（木部を見る）」

木部 「そのようですね」

水恵 「……私」

飯田 「でも」

小春 「なんかまずいんですか？」

「あー……えーと僕はそのう、研修医だもんでえ、あ、あの看護師長の木部さんです。看護師の偉い人。」

「こちら、今度のイベントを手伝ってくださる方々です」

「はじめまして。イベントの件は聞いています。」

「私もお手伝いさせていただく予定です。」

「ただ、一般病棟の患者さんがこちらのイベントに参加するのは難しいかと思えます」

小春 「なんですか？」

木部 「飯田先生、お願いします」

飯田 「え、僕？えーとあのその、えーと

（水恵と木部と小春達を交互に見ながら）

誰目線で話さばいいんですかね、これ」

木部 「バカ」

飯田 「え」

木部 「ちよつと、あなたたち（姫香と小春を呼ぶ）こちらへ、

飯田先生、水恵さんのシヨール、落ちそうなので」

飯田 「え？落ちてませんけど」

木部 「（飯田にアイコンタクト）」

飯田 「え？あ！ああ！わかりました！

（木部にアイコンタクトしながらシヨールを落とす）

わー。水恵さん、シヨールがく拾いますね、で、こっちで

直しますね（ちよつと木部たちから離れる）」

水恵 「木部さん、大丈夫です、私、大丈夫だから」

木部、姫香と小春を呼ぶ。

木部 「失礼しました。

こちらの病棟の皆さんは告知されてる方々ばかり
なんですけど、一般病棟の患者さんは違うんです。

つまり治療方法も違うわけなんです。ですから」

「え、それって……」

「ん？」

「じゃあ、あの方も……？」

「いえいえいえ！そいつうふうな意味ではありませんよ。

早とちりですね」

「治療方法が違うと問題あるんですか？」

「前例もありませんし、院長に聞いてみないと」

「院長……って」

「水恵さんは院長の娘さんなんです。

一応、聞いてみますが……私からはなんとも」

「木部さん。ごめんなさい、私……」

「どうしても参加されたいんですか」

「……無理よね、わかってる。」

でもフアッシュョンシヨールやるんですって。

いいなあって、ちよつと思っただけなの。

……やっぱり……うちの病棟に移れば参加出来るのかな」

「……」

「ごめんなさい」

木部 「……戻りましょうか」

水恵

木部

飯田 「あ！水恵さん、せっかくだから、サインもらっちゃいます？」
水恵 「サイン？」

飯田 「ほら、これ、昔、ちょっと人気あった姫香ですよ、モデルの。
いや、知らないか、水恵さん。別に知らなくてもいいんですよ」

姫香 「失礼だなあ」

水恵 「姫香……」

姫香 「……」

木部 「さあ、行きましょう。それでは失礼します」

飯田 「僕が押します！僕、院長に呼ばれてて」

木部 「また、なんかやらかしたんですか」

飯田 「やだなあ、そんなわけないじゃないですか、

ねえ、水恵さん」

水恵 「知らない」

飯田 「え、なんか怒ってます？」

話しながら、3人、上手にはけていく。

小春 「なんだかいろいろあるのね、そりゃそうか」

姫香 「……」

レクリエーション室の方向から顔を出す洋弥。

洋弥 「おーい、会議始まるよ」

小春 「あ、今いく、ほら、姫香」

2人、荷物を持って、丘の上に登っていく。

明かりがゆっくり変わっていく。

【二場】(二階、診察室)

椅子に座ってる美桜。

お見舞いにきている武史。

青山と横田。

青山 「美桜さん。どうですか？まだ痛みありますか？」

美桜 「いえ、すっかり落ち着きました」

横田 「今日は、ゆっくり寝てまじょうか」

美桜

「もう大丈夫です」

青山

「まあ、そんな張りきらずにね。」

美桜

「ほら、こちらに引越してきたばかりで、疲れもでたんでしょう」

青山

「でも、今日は実行委員の打ち合わせがあるんです」

横田

「あれ、そうだった？」

青山

「そうですよ」

美桜

「凄いな、美桜さん、やる気ですね」

青山

「こちらに転院してきてからも、ずいぶん色々悩んでたんですけど。」

美桜

「でも、イベントのお話を聞いたときに、凄くやりたくて。」

青山

「今は毎日楽しくてワクワクしています」

美桜

「タイミング良かったんですね」

青山

「ええ。私はみんなみたいに特別、何かしてたわけじゃないので、

美桜

何が出来るか全然分らないんですけど」

青山

「心強いですよ」

美桜

「まだ……何か、出来ますか」

青山

「もちろんです」

横田

「じゃあ、レクレーションルームまで一緒にいきましょうか」

青山

「そうだね、そうしよう……えーと……美桜をちらつとみる」

美桜

「先生、いいんです、もう帰るって言っていましたから」

美桜、診察室をでていく。

横田があとをおっていく。

残された青山と武史。

武史、うなだれる。

青山

「まだ納得いかれませんか」

武史

「……」

青山

「そうですよね」

武史

「……は病院ですよね」

青山

「ええ」

武史

「あなたは、医者ですよね」

青山

「はい」

武史

「治せないってなんなんですか」

青山

「……」

武史

「なんなんですか、終末医療って。終末？終わり？わかんないです」

青山

「松山さん、終末医療というのはですね」

武史

「聞きました、何度も。何度も。何度も聞いて。」

青山

「何度聞いてもやっぱりわかんないんです」

武史

「そうですか」

青山

「一度は理解しようと思いました。妻が望むなら理解しなきゃって。」

武史

「でもやっぱり。」

「この選択は間違ってるんじゃないかって思っていました」

青山 「美桜さんがお望みになれば、もちろん、またあちらの一般病棟で治療を続けることは可能です」

武史 「望めばって、なんなんですか。望むようにしてくださいよ」

青山 「それは……美桜さんのお気持ちなので……」

武史 「……確かに、ずっと抗がん剤の治療を受けてたときより、

彼女は落ち着いてる気がします」

青山 「はい」

武史 「でも、治らない」

青山 「ええ」

武史 「あなた医者ですよね」

青山 「はい」

武史 「治せない医者も医者っていうのかが」

青山 「はい。私は医者です」

武史 「……」

青山 「すみません、松山さんのお気持ちもわかります。わかりますが」

武史 「ごめんなさい、言葉がすぎました」

青山 「いえ、私」そ……」

武史 「また来ます……」

武史、病室を出ていく。

残された青山、

ポケットから、りんごを取り出し、見つめる。

飯田 「青山先生」

飯田が入ってくる。

青山 「あれ、飯田先生。今日はあつちのお仕事じゃなかったっけ」

病室に入ってくる大塚院長と木部看護師長。

青山 「ああ、院長。木部師長」

大塚 「青山先生。ああいったご家族のケアもするのが

あなたたちの仕事ではないんですか？」

青山 「その通りです」

大塚 「ご家族が反対しているのに、終末医療に切り替えるのは
どうなんでしょうね」

青山 「一度は、ご主人も納得されていたんですが」

大塚 「つまりまた納得いかなかったってことでしょう。」

尚更、考え直さないといいけませんね」

青山 「こちらに何か御用ですか」

「……」

大塚 「……今、院長の娘さんが、向こうの病棟に入院してるのですが」
飯田 「水恵さんのことですか」

青山 「はい」

木部 「今度、「こちらでやるイベント」に」

青山 「ファッションショーですか」

木部 「それに参加したいと」

青山 「僕の方は構わないですよ」

大塚 「水恵には、全てを話していいんです」

青山 「そうですか」

大塚 「するつもりもありません」

青山 「はい」

大塚 「もしかしたら、明日にでも

新薬ができるかもしれない。

青山 私は最後までベストを尽くしてたいんです」

大塚 「もちろんです。けれど、先生。それは、先生のベストであって、

患者さんのベストではありません」

大塚 「わかっています」

青山 「最先端の医療の技術で、どこまで病気と闘えるのか。

どこまで人を永らえるのか」

大塚 「医療は闘う術です。人が人のために施す技術です」

青山 「ええ」

大塚 「私は病と闘いたい」

大塚 「僕もです。でも、闘うのは患者さんです」

青山 「……」

大塚 「僕たちは……闘うための武器なんじゃないでしょうか。

どの武器を選ぶのかは、患者さんの自由です、でも」

大塚 「望んで病気になる人はいません」

青山 「そうです、望んでいないのに、闘うために」

いきなり武器を選ぶのは難しい。

だからこそ。

大塚 「僕たちはひとりひとりの心と向き合っていかなければ」

大塚 「……」

青山 「心にむきあえば、答えはひとつではなく。

選択肢も無限になる。

ひとりひとりの心が無限にひろがってるからこそ」

大塚 「でも命はひとつです」

青山 「……はい」

大塚 「命に向き合う」とと、心に向き合う」とは一緒でしょうか」

青山 「……僕にもまだ明確な答えが見つかってないんです」

大塚 「青山先生。飯田先生。木部師長。

あなたたちは、自分がガンになったら告知されたいですか？」

飯田 「えー、どうかな、えーでも、自分で気づいちゃうんじゃないかなあ……」
大塚 「そういうことを言ってるんじゃないやありません」

飯田 「すみません」

大塚 「私はきつと絶望で苦しくなるでしょう。医療の限界を知ってるからこそ……」

大塚 「そういう思いをさせたくないんです」

木部 「私は……私は告知していただきたいです。」

飯田 「絶望すると思っんですが、やれることやっておきたいって

飯田 「思います、それが抗がん剤治療であっても」

飯田 「それこそ、その患者さんによるんじゃないんですかね」

大塚 「そうですね、家族の意思だって大事です」

青山 「確かに、自分がガンになった時は、

飯田 「やり残したことをやりたいから告知してほしいって思っけれど、

大塚 「家族がガンになったら、ショックを与えたくないから

大塚 「告知しないでほしいと、意見が変わる人が多いです」

飯田 「立場変われば、いろいろです」

飯田 「僕の調べによりますと、ホスピスと聞くと、あきらめられたって

飯田 「誤解される方も多いみたいです。なんか見捨てられたみたいなの

飯田 「院長、僕もまだ明確な答えはわかりません。」

飯田 「わからないどころか、自分の無力さにあきれることだってある。

飯田 「でもだからこそ。患者さんの笑ってる顔が見たいって思っんです」

飯田 「それは結局は医者ベストになるのでは？」

飯田 「そうかもしれない。でも、笑っていれば……。笑っていることは、

飯田 「患者さんにとってもベストなのかもしれないって」

飯田 「無理に笑顔を作らせてるかもしれない」

飯田 「……はい」

飯田 「私は……」

飯田 「水恵さんが、イベントに参加するしないは、

飯田 「院長にお任せします」

飯田 「ええ」

飯田 「全てを話しかどうか、院長次第かもしれない」

飯田 「……」

飯田 「水恵さんが今までどう生きてきて、どう生きていきたいか

飯田 「それを知ってるのは、院長だと思いますから」

飯田 「困ったことにね、わからないんです。それが。わからない」

飯田 「大塚、病室をでていこうとする。」

飯田 「先生」

飯田 「……」

飯田 「(りん)をさします」

飯田 「遠慮しておきます」

青山 「お嫌いですか」
飯田 「あれですか、白雪姫の毒りんごを思いたすとか」
大塚 「いいえ、私はアダムとイブのりんごを思い出します」

木部が扉をあけると、武史がたっている。
大塚、一礼し、武史も一礼する。
武史を部屋に招き入れて、
大塚、木部、部屋から出ていこうとする。

大塚 「飯田先生、今日は、もう好きにしていますよ」
飯田 「え？好きにっえ？えっえーと、帰っていいんですかね」
大塚 「医者やめたいなら帰っていいですよ」

大塚、木部、出ていく。

飯田 「えー、どっしりようかなあ」
青山 「君の自由だ」
飯田 「自由って言われちゃうと、難しいじゃないですか」
青山 「二択だって難しいのにね。たくさんあるよって言われたら
余計に難しいよねえ」

青山、武史に一礼する。
武史も一礼して、
3人で話しはじめる。
二階の明かりゆっくりおちていき、
暗転。

【三場】(中庭)

暗転の中から音楽。
明かりが入る。

車椅子に座ってる美桜。
下手ベンチに座っている原川、汐里。
上手にいる小春、写真を取る洋弥。

丘の真ん中くらいから、姫香のウォーキングに合わせて現れる、
陽介、柚子、柘平、和歌、さや、一佳、日和、一同ボーリング。

原川 「凄く凄く」
美桜 「かっこいいですねっ」

小春 「うん、いいんじゃないの、だいぶ上達してるわね」
和歌 「練習してるもん、ねー」

子供たち 「ねー」

姫香 「じゃあ、ウォーキングの練習は今日は」「ままで、

柘平 これからファッションショーのテーマを決めます」

柘平 「テーマ？そんなん必要なの？」

姫香 「そうね、何を着るかにもからんでくるし…」

柘平 テーマがあつた方が統一感もあつて楽しいかも」

劇場奥扉から直綺が走りこんでくる。

直綺 「兄貴、兄貴~~~~~！」

柘平 「うわ、来ちゃったよ」

和歌 「直綺くんだ」

直綺 「兄貴、僕が来ましたよ、あ、みなさん、御揃いでーどつもどつも」

柘平 「お前、兄貴って言つなつていつも言つてるだろ」

直綺 「だって、兄貴は兄貴じゃないですか。」

小春 あれ、こちらの綺麗なお姉さん方は？」

小春 「やだ、キレイだって」

直綺 「あ。違います、こちらです(姫香をさす)」

小春 「なんだおまえ」

直綺 「ごめんなさい、冗談が通じそうなお方かと」

小春 「初対面ですが」

柘平 「今度さ、ファッションショーをイベントでやることになってて、

直綺 そのアドバイザーで来てくれてるモデル事務所の方々」

直綺 「へーファッションショー」

柘平 「すいません。」「じつ、直綺っていつんですけ？」

直綺 「どつも」

柘平 「アクシオンやった頃の後輩なんです。すいません。

直綺 うるさくして。お前、邪魔すんなよ」

直綺 「邪魔しないんで、僕も聞いていいですか」

姫香 「どつぞ」

柘平 「で、何の話してたんだっけ」

姫香 「そうそう。テーマを決めたいなあと思ってるの。」

直綺 えーと、「このショーをやるって思ったのは」

直綺 「私」

直綺 「きつかけとかあるのっ」

直綺 「えー、恥ずかしいな、こんなかつしててんだけど」

直綺 「言っちゃえ言っちゃえ」

柘平 「(むむ)」

直綺 「私には、夢があつて。もちろん、みんなにも。

直綺 きつと。みんな。なりたいものがあつたわけで」

陽介

「うん」

柚子

「なりたいたいものになってみたいって思ったんだ。

和歌

で、それで、「この場所を、歩く……みたいなの」

直綺

「ランウェイっていうんですよね、あの花道。」

柊平

「この場所に、「この景色の中に、私達の花道が出来たらいいよね！」

直綺

「えー、いいな、兄貴、僕も一緒に歩きたい」

柊平

「お前はダメだろ、俺らが主役だから」

直綺

「えー」

和歌

「いいじゃない、直綺くんも一緒に歩けば」

柊平

「なんだけだよ」

姫香

「そっか、ただ歩くだけじゃなくて、なんかやってもいいのかも。

直綺

「やりたいことをやりたい人と一緒に」

柊平

「いいっすか？ほら、兄貴、また、一緒にやれるじゃないですか」

直綺

「なんだよ、お前、俺が何やりたいと思ってんだよ」

柊平

「当然、兄貴はアクションスターですよ！

直綺

かつ「よかったんだから！兄貴の蹴りはね、「うっ、うっ」っていう癖があって

柊平

これが「うっ」決まるとかつ「うっ」よくて！

直綺

俺、絶対、兄貴みたいになって、一緒にステージ」

柊平

「……」

直綺

「……「めんなさい、兄貴」

柊平

「………なんだよ、お前、照れるじゃないかよー」

小春

「いいんじゃないかな、そのテーマ。なりたいたいもの……夢？」

姫香

「じゃあ、テーマは夢。夢で決定ね」

一同、拍手。

美桜

「あの一……」

原川

「はいはい、みんな、聞いて」

美桜

「あの、ちょっと考えたんだけど、

美桜

そのテーマを物語の続きにしてみましたどうかなって

柚子

「物語の続き……」

美桜

「……私はみんなみたいに、なりたいたいものってというのが

美桜

よくわからなくて。

美桜

でも、「この景色の中を歩くみんなを、

美桜

なりたいたいものになったみんなを見たいなって思う。

美桜

そして。できたら。

美桜

その夢がおしまいにならなければいいのって思うの」

全員

「……」

美桜

「でも……」

全員

「うん」

美桜

「でも小さい頃、読んだたくさんのおとぎ話にも、

美桜

きつと続きはあるのよね。私達の知らないところまで

物語は続いているの。

その続きは誰かが繋げているかもしれない」

「誰かが」

「うん。だから。夢の続きを観れるショーにできないかなって」

「素敵」

「うん素敵」

「でね、私は、おはなしを考えるのが好きだから

良かったら、そういう役回りやってみたいなって」

「いいじゃない、作演出ねっ」

「そこまでは出来るかわかんないんだけど」

「じゃあ、それは私達も一緒に考えようか」

「えっ」

「だって、私たち、アドバイザーだから当然演出も関わらなくちゃ」

「そうなのっ」

「そういう流れよね。出演者だけじゃショーは出来ないんだもん。

いろんな役割全部、重要なんだから」

「あ、じゃあ、私も、その演出部に加わります。

他のスタッフも先生方にやってもらいますから」

「美桜組として、こきつかったらいいわよね」

「美桜組」

「こめん、気に障った？」

「ううん。なんか楽しくて。

普通の専業主婦だった私が、美桜組だって(笑う)」

みんなで笑いあう。

「(子供たちに)みんなは？ショーの時、何になりたい？」

「えー」

「内緒内緒」

「ねー」

丘の方で笑い転げる子供たち。

「えー、なに？教えて」

子供たち、顔を見合わせる。

子供たち

「大人になりたい！」

子供たち、また、笑う。

顔を見合わせる大人たち。

姫香 「そう、じゃあ、そついう衣裳を用意しなくちゃね」
さや 「お願いしますよ」

横田がやつてくる。

横田 「お食事です」
原川 「あ、もうそんな時間！」
横田 「んもう、原川さん」
原川 「ごめん、ごめん、じゃあ。みんな食堂にきてくださいーい」
一同 「はい」
美桜 「じゃあ、続きは、食事の後に、よろしくお願いします」
美桜 「あ、あさ。休まなくても平気なの？」
姫香 「もちろん、休みたかったら、休むわよ。」
美桜 「でも今は、動いていたいから」

中央から食堂に消えていく、面々。
いつの間にか、汐里の姿はなく。

姫香と小春、洋弥、直綺が取り残される。
4人、顔を見合わせる。

直綺 「あの…よろしくお願いします」
小春 「え、いえ、あの、ねえ」
直綺 「僕、兄貴が病気になるってから。最初は、なかなか顔出せなくて。なんていうか、どついう顔していいかわかんなくて」
姫香 「…」

「でも、兄貴の中にいる僕が。最後は悲しい顔じゃ嫌じゃないですか。兄貴の中で馬鹿な奴でいたいじゃないですか。だから、ほんとは、今もどついう顔していいかわかんないんだけど、見てようかなって。笑ってみてようかなって」

直綺 「無理して笑ってるのっ」
姫香 「無理じゃないです。笑いたいです」
直綺 「でも笑うの辛くないのっ」
姫香 「辛いのは兄貴だから。」

「僕は辛くても笑いたい。でも兄貴は。きつと。笑おうとしてくれるんです。だったら。それに答えないじゃないですか。」

小春 えーと、だから。だから。よろしくお願いします」
直綺 「いえ、あの「さや」や」

直綺 「僕、兄貴に、嘘ついでる」ことになりますかね」
洋弥 「いや、…嘘とは違うんじゃないかな」
直綺 「でも、それでもいいのかな。笑っていたいののはほんとだし」

直綺、頭を下げて、みんなのあとを追って中央にはけていく。

直綺

「兄貴、兄貴！僕もおなかペこりんですよー！」

3人、顔を見合わせる。

姫香

「ねえ、私、大丈夫？」

私、なんにもないのに。」

私なんて、

迷ってばかりだし、落ち込んでばかりだし、

そのくせ、見栄はって、嘘も真実もわかんなくして。

ほんとの自分は、何を信じていいかもわからない。

夢やぶれて、夢壊して、夢あきらめて。

そんな私なんかが、偉そうに何がきんのっ？」

「姫香」

「姫ちゃん」

「……ごめん。ちょっと、自分でも言ってる意味がわかんない。

急になんか、ごめん。なんだか笑えない。

私、笑えない」

柗平

「無理しなくていいですよ、姫香さん」

柚子

「うん、大丈夫」

いつの間にか、現れてる、柗平と柚子。

柗平

「いやー、い、飯、一緒にどうですかって、呼びにきたら、

なんか、変なとこに出くわしちゃって。

馬鹿でしょ、あいつ、ねえ」

「ねえ」

「すみません、ほんと」

「なんで笑っていられるの」

「えっ？」

「姫香」

「なんで笑っていられるんですか」

「うーん……直綺とは逆かなあ。」

あいつの中にいる俺がかっ「悪いの嫌なんですよね」

「だけど、そうはいつでも、そんなの嘘でしょっ？」

ほんとと、ほんととは

「姫ちゃん」

「ほんととは……」

「怖いよ。死にたくない。」

まだやりたい」といっばいあったよ。怖いよ。死にたくねえよ。

柗平

姫香

洋弥

姫香

柗平

姫香

小春

柗平

姫香

柗平

柚子

柚子 毎日、体が動かなくなるんだよ、毎日、泣きたいんだよ
「泣いて甘えてしがみつきたい。忘れないでって叫びたい」
柀平 「だけどさ、俺はもう死ぬんだよ。」

柀平 「だったらさ。だったら」
「みんなと笑って、笑わせて、みんなの怖さをやわらげてる
なんでもないよ、なるようになるさって」

柀平 「イベントってさ。道しるべになるんだよね。選択肢がいっぱい
ある中で、今日の道しるべみたいなの。」

柀平 「ああ、そうか。俺は今日は、」
「……」
柀平 「励みになる」

柀平 「あー、しんみりしちゃったな、これ、直織のやつせいだな」
「だね」

柀平 「グーパンチしますから」
柀平 「お食事、来てくださいね」

柀平と柚子、じゃれあいながら、はけていく。

姫香 「……」

洋弥 「凄い。パーだよ。気づくと、シャツターいっはい切ってる。
でもこれは同情なんかじゃないんだよ」

小春 「うん、わかる…わかってないのかもだけど、わかる」
「……」

小春 「ちよつとマネージャーとして忠告ー！」
「はー」

小春 「私がモデル時代に、ポロクンだったときに、あんた言ったよね。
どんなにポロポロでも、胸張って生きていけって。」

姫香 「私の姿をみてる人が、必ずどこかにいるからって」
「……言っただけ」

小春 「だけど、そんなもんは、気休めだよ、ああ、気休めだー！」
「小春ちゃん」

小春 「でも気休めでもさ。気持ちが休まるって凄いことだよ、
心が休まるとき。ああ、またがんばらって」

小春 「ちよつと余裕がうまれるじゃないか」
「……」

小春 「そしたら。いい天気だなあとか、雨降りそつだなあとか。
空を見てると、」
「口も上を向いてくるような気がするじゃんか」

洋弥 「よー」
「よー」
「よー」

姫香 「よー」

小春 「あんたの姿をみてる人が必ずいる」

姫香 「あんたのことね」

小春
姫香

「笑え、姫香！」
「笑え」

美桜と和歌が立っている。

和歌
小春
美桜
姫香
和歌
姫香
美桜
小春
和歌
姫香
小春
美桜

「あの」
「あっ！」「めんなさい、今これ、企業秘密の時間で」
「大丈夫」
「笑え、私、笑え」
「大丈夫よ。こっち見て」
「笑え、私」
「こっちを見て」
「…笑えない、どうしよう、小春」
「どうしようか」
「だから、大丈夫。そのままいいんだってば」
「そのまま」
「このまま」
「私たちをみて」

姫香と小春、2人を見る。

美桜
和歌

「いろんな笑顔があるわ」
「そりゃさ、馬鹿みたいに、笑ってるのだって楽しいけど」
「うやうや向き合っただけでも嬉しいことだもん。」
あのね、美桜さんが姫香さんたちに渡したいものがあるんだって

美桜、薄汚れた日記帳を差し出す。

姫香
美桜
姫香
美桜
姫香
美桜
姫香
美桜

「なに……？……日記？」
「これから創り出す物語の参考になるかはわからないんだけど」
「いや、日記とかは」
「あなたたちに読んでほしいの」
「なんで？」
「伝えたいひとがいるの。」
でも、私の言葉じゃもう届かないの。
きつと私からだど、いろんな感情があふれちゃうのだと想っ。
だからね。このショーで、伝えたいの」
「……」
「最近ね、私は、特別な何かになれなくてもいいんだなって
思うようになったの。」
ずっと、なりたいたいものがない自分に引け目があったりしたの。
あっても出来ない自分にうんざりしてたの。」

姫香
美桜

でもね。毎日、やりたいことはあるのね。
それで充分なんだって思うようになったの」
「……」

「そこにいるだけで。生きてるのよ、充分。
でも。もしも。」

自分の続きを描いてくれる人がいたら」

日記を受け取る姫香。

劇場奥扉から秋美が現れる。
続いて、結衣と初音が現れる。

秋美
和歌
姫香

「和歌〜！おーい、和歌〜！」

「わっ！やばい、うるさいのが来た」

「うるさいのっ」

子供たちが食堂から顔を出す。

さや

「あ、マザーだ！マザーが来たよ！」

秋美

「和歌ちゃん！来たわよ〜」

和歌

「もう、お母ちゃん、声大きいの」

小春

「お母ちゃんっ」

和歌

「じゃ、そんなわけでまた会議で〜！」

秋美

「あらやだ、また逃げようとして、この親不孝者〜！」

笑いながら逃げる和歌と笑いながら追いかける秋美、
丘の上にはけていく。

子供たちも追いかける。

秋美のあとから来た結衣と初音が会釈をする。
柚子、食堂扉から現れて、初音を迎え入れる。

明かり、ゆっくり変わっていく。

美桜が促すように、皆を連れて食堂にはけていく。

【四場】（診察室）

二階に明かりがゆっくり入る。

りんご「さ」を見てる青山。
困っている横田。

もっと困っている飯田。

水恵が車椅子に座っている。
傍らに木部。

青山 「よいしょ……あ。すみません」

水恵 「いえ。言っちゃいますよね、よけいあって」

青山 「ええ、言います言います。最近じゃ独り言のやつに言います」

水恵 「私もですよ。何にもしてないときも、よけいあって」

青山 「言っちゃいますよねえ」

水恵 「言います。独り言みたいです」

子供たちの笑い声。

青山 「元気でしよう？いや、適切じゃないですね。元気な声ですよね」

水恵 「もう疲れちゃいました。なんだか。疲れちゃいました」

青山 「(りんごをみながら)そうですね」

木部 「水恵さん、そろそろ帰らないと。院長が心配しますから」

水恵 「大丈夫、木部さんに頼んだことは言わないから」

木部 「そういうことでもなくってですね」

青山 「それで、どうされたいんですか？」

水恵 「わかりません」

青山 「では私たちもそう答えるしかないです。」

水恵 「わかりません。」「こはそういうところですから」

水恵 「そうなんですよね。誰かに決めてもらおうなんて、

おかしな話なんです。自分の「となのに。」

でも。わからなくて。」「のみなさんは、

自分で決められて、」「こにきたんでしょっか」

青山 「そうですね」

水恵 「すこいです」

青山 「タイミングみたいなものじゃないでしょうか」

水恵 「タイミング」

青山 「そういう巡ってくるものが、合わる瞬間があるのだと、

そう思います」

水恵 「決められない私は。今は、そういうタイミングなんでしょうか」

青山 「ええ、たぶん」

飯田 「先生」

水恵 「誰かに決めてもらえたら楽になるのになって思ってしまったって」

青山 「ええ」

水恵 「こうしたほうがいいよとか。こうすべきだってテキストが

こうなったときにあればいいですよ」

青山 「いいですね、自分のテキストですか。あったら僕も欲しいです」

「先生も?」

「欲しいですよ。もちろん」

「正しい答えなんてないのはわかってるんですけどね。」

どこかで求めてしまってるんです。どれが一体正しいのかって

「よくわかります」

「こっちにきたら、また後悔してしまいそうです」

「後悔したら戻ってもいいんですよ」

「先生」

「そうなんですか」

「もちろん、引き返せます」

「そうですか」

「けれど、ほら、この砂時計みたいなね。」

(砂時計をひっくりかえす)

時間は流れていますから。見えないところで凄く速さで

「はい」

「引き返せますけど。この流れたものは、取り返せません」

「はい」

「それはよくお考えください」

「わかります。とても」

「水恵さん」

「木部師長、私は優秀な医者になれたと想いますか?」

「いえ、全く。看護師だって大変なお荷物でしたからね」

「木部師長」

「だってほんとですもの。なんでこんな子がって思うくらい、不器用だし。しかも順序立てて物事を考えられないんです。」

先の先が読めないんですよ。致命的ですよ。

私、院長には何度も水恵さんは看護に向いてないって

言いましたから」

「ありがとうございます」

「でも院長は後継ぎにこだわってましたからね」

「先生、私ね、医者にも看護師にもなりたくなくなっただんです」

「そうだったんですか」

「でも母はこの病院の後を継いでほしがってたし、

でも私には医者の才能もなくて。看護師になったけど、

むいてなくて。今度、お見合いする事になってたんです」

「えー!」

「知らなかったの?」一般病棟の外科の」

「横田さん。余計なことは喋らない」

「すみません」

「でも。病気になっちゃいました(笑う)」

結局、母の何の役にも立てませんでした」

水恵

青山

水恵

青山

水恵

青山

飯田

水恵

青山

水恵

青山

水恵

青山

水恵

青山

水恵

青山

水恵

木部

水恵

木部

飯田

木部

水恵

木部

水恵

青山

水恵

飯田

横田

木部

横田

水恵

水恵 「でもね、木部さん」

木部 「はい」

水恵 「私、お母さんが好きだったんです」

木部 「知ってます」

水恵、微笑む。

水恵 「お時間いただきありがとうございます」「ございました」

青山 「いえ、とんでもない」

水恵 「先生。私、なりたいたいものがあつたんですよ」

青山 「なんですか？」

水恵 「デザイナーです。」

青山 「それで。これ(スケッチブックを渡す)」

水恵 「姫香さんに渡していただけますか？」

水恵 「私、大ファンだったんです。モデルの姫香さん。」

水恵 「憧れて憧れて。」

水恵 「だからいつか、私がデザインしたお洋服を姫香さんに」

診察室の明かりがゆっくり落ちていく中。

水恵が倒れる。

緊迫していく診察室。

診察室の明かりが消えていき(陰芝居で続きを進行する)

中庭に明かりが入る。

姫香と小春と洋弥が打ち合わせをしている。

柚子と初音もお喋りしながら時々振付をしている。

秋美がポーッと座っている。

まとわりついてる子供たち。

さや 「ねえ、マザー。今日せっかく来たのに元気ないねえ」

日和 「元気ないねえ」

一佳 「ねー、いつもみたいに歌わないの？」

秋美 「今日はね、ちよっとお休み」

さや 「しょうがない、癒してやるか」

一佳 「癒してやるか」

日和 「せーの」

子供たちが笑いながら歌いだす。

秋美も嬉しくなって、のっかって歌いはじめ、やがて大騒ぎする。

柚子と初音もノリノリで踊る。

劇場奥扉から会社帰りの武史が現れる。
食堂から和歌が現れる。

和歌

「お母ちゃんー！」

秋美

「あらやだ、違うの、これはその」

和歌

「もうまた調子にのってー！」

秋美

「だって、癒されちゃったんだもん」

和歌

「ほら、松山さん、びっくりにしちゃってるじゃないの。

すみません。うちの母です。

武史

「こちらが、美桜さんの旦那さま」

武史

「すみません、無理言いつて」

秋美

「いえ、とんでもない、私でお役にたてるならば」

和歌

「役に立たないと思えますよ」

秋美

「このこの」

和歌

「痛い痛い痛い」

武史

「あつ、手荒なことば」

秋美

「大丈夫ですよ、こんなことじゃ死なないんですから」

和歌

「ねえ」

秋美

「それなのにガンってやつは厄介ですよね」

武史

「あの、まだ」

秋美

「あ、さやちゃん。おはちゃんね、」

さや

お菓子もってきたんだけど、バックの中にね」

さや

「ほんとっどいい」

秋美

「あれ、バックがない」

さや

「えーマザー、ちよつとちよつと」

秋美

「和歌、ちよつと、行ってきてよ」

和歌

「もうー(持ち歩かなきゃ、ねえ)」

(さや)

「ねえ」

和歌、子供たちをつれて、下手入はけていく。

秋美と武史、顔を見合わせる。

秋美

「お気持ち、わかりますよ。そりやねえ。

助けられるものなら、助けてやりたいし。

何か手立てがあるならって。今だって、そう思ってますから」

武史

「告知されたきっかけっていうのはなんだったんですか」

秋美

「なんだったかなあ……。うちは、娘とずっと二人で

やってきたんで……。なんか嘘ついて、

はれちやうみたいたいとあつて……。

バレちゃったのかなあ」

武史
秋美

「はあ」
「大体、いつもあの子の方がしっかりしてましたからね。すっかり者のあの子が、歌手になるって言ったときは、え〜って思いましたけどね。あ、私の影響なんですけどね。思えば、良くなかったんですかね、育て方とか」

武史
秋美

「いえ」
「そう思ったりもしますよ。それから、ホスピスとかいう話を聞かされて、見学に連れてこられて」

武史
秋美

「ええ」
「覚悟を決めたと言いますけど。そんな覚悟なんて出来てるわけがないんですよ」

武史
秋美

「ええ」
「うちだって覚悟も出来てないのに」

武史
秋美

「はい」
「だから私言いました。あら〜いい」と「じゃないの〜って」

武史
秋美

「え？」
「覚悟を決められないはずなのに、必死で選んだ道なんです。」

武史
秋美

「でも」
「いい」と「じゃないの〜って笑っていいじゃないですよ」

武史
秋美

「でも」
「生まれた時は、3キロも満たない子でしたよ、そりゃもう可愛くて可愛くて。」

29

武史
秋美

「あの子が笑った時に、こっちも笑っちゃう。言葉をたくさん覚えて、夢中になって絵を描いたりはしりまわったり。」

武史
秋美

「気が付いたら。ほんと気が付いたらねえ」
「まだ治療を続けようとかそう思ったりはしませんか」
「もちろん、思ってますよ。でも、やっぱりね。」

武史
秋美

「笑ってる顔を見てたいんですよ。あの子が。また。別の選択をしていたとしても。同じです。」

武史
秋美

「笑ってくれてたらいいんですよ、別に馬鹿笑いしてなくてもね。顔みればわかりますから」

武史
秋美

「僕は、まだ、そこまで思えないんですよ、あいつがいなくなる人生、考えられないし、考えたくもな〜」

秋美
武史

「ええ」
「一番、悔しいのは。」

武史
秋美

「こっなるまでそう思ってたかった」とで
「そんなもんですよねえ」

秋美

秋美と武史、うなだれる。
下手から和歌が子供たちとやってくる。

和歌

「お母ちゃんー！」

秋美

「ああ、おかえり、バックあった？」

さや

「あったけど、お菓子入ってなかったよ」

秋美

「ありゃ、じゃあ別のバックだ、ちよつと行って」「ちよつと」

秋美、武史に「一礼して、下手に子供たちとはけていく。」

和歌

「母から聞きました？」

武史

「えっ？」

和歌

「やだ、聞いてません？お願いしてあったの」。

あのですね、今度、フマッションシヨ―やるんですよ、
それで

武史

「フマッションシヨ―？」

食堂から現れる美桜。2人、目があい、
美桜、軽く会釈して姫香たちのところへいく。

武史、美桜が楽しそうにしている様子を見る。

和歌

「それですね、松山さんに手伝ってほしいんですけど、
松山さん、体操部だったんですよね」

和歌と丘の上にはけていく。

食堂から陽介と結衣が現れる。

後から興味津々で追う柊平と柚子。

陽介

「あーもうだから帰れってば」

結衣

「やだ」

陽介

「なんでだよ。バイトあるんだろ」

結衣

「今日は休みだから」

陽介

「あ、そ」

柚子

「ちよつと、陽介さん、なに、その言い方」

柊平

「あの、彼女さんですか？」

陽介

「違う違う」

結衣

「違います」

柚子

「ですよねえ。こんな可愛い子がまさかね」

柊平

「こんなおじさんとねえ」

陽介

「失礼ですよ」

レクレーション室から直綺が現れる。

直綺 「兄貴、打ち合わせしましょうよ〜って、あれ」

結衣 「あ」

直綺 「結衣ちゃんだ」

結衣 「直綺さん。なんているんですか？」

直綺 「俺、先輩に逢いに來てるの」

結衣 「あ、そうなんだ」

柘平 「なんだよ、直綺、知り合いつ」

直綺 「あれですよ、俺らの『ローショー』のMCやっ
てくれている結衣ちゃんですよ」

柘平 「いや、俺知らないけど」

直綺 「あーそつか、兄貴がレッドやっつたときは別の子でしたっけ」

結衣 「え、うそ、もしかして伝説のレッドのっ」

直綺 「そうそう、伝説のレッドの」

結衣 「うわあ。お逢い出來て光榮です。」

柘平 「私、あなたの大ファンで」

柘平 「え？見てくれたことあんの？」

結衣 「もちろんです。大好きでした」

柘平 「いやいや」

結衣 「それでMCになりたいって思ったんですもん」

柘平 「えーそうなの？」

結衣 「でも私が始めた頃には、レッドさんもう別の人で」

柘平 「そんな変わらないでしょ」

結衣 「全然違いますよ！ほんと素敵でした」

柘平 「やーありがとー」

直綺 「兄貴、ひゅーひゅー」

離れて寂しそうにしている陽介。

柘平 「落ち込んでる」

陽介 「んなわけないでしょ」

柘平 「えー？嘘嘘、落ち込んでますね、これは」

柘平と陽介が仲よさそうに喋っているのを見る結衣。

柘平 「で、陽介さんとはどのような関係なんですか？」

直綺 「…単なる。バイト先の。先輩後輩です」

結衣 「あ、結衣ちゃんもあの遊園地でバイトしてんだ」

柘平 「MCのお仕事ない時は、スタッフやっつてるの」

柘平 「へえ〜」

結衣、柘平と直綺を押しつけて陽介のもとに行く。

結衣 「陽ちゃん」

結衣、2人の間に割り込む。

それから大きなバックを渡す。

結衣 「はいこれ」

陽介 「なにこれ」

バックの中から熊の着ぐるみがあらわれる。

陽介 「あ」

結衣 「熊五郎。こないだ引退したんだよ。」

陽介 「入る人が辞めちゃったから」

陽介 「そうか」

結衣 「なんで急に辞めちゃったのよ」

陽介 「それは……」

結衣 「なんにも言わないで、いなくなるなんてさ、

陽ちゃん、いないと、寂しいじゃん。」

……あ。熊五郎が」

陽介 「代わりのやついないのか。……熊五郎」

結衣 「陽ちゃんしかいないよ」

陽介 「……」

結衣 「だからさ、熊五郎のためにもさ、また戻ってくればいいじゃん。」

結衣 「熊五郎のために、復活すればいいじゃん。」

陽介 「ね、いつ退院できるのっ？」

陽介 「……」

直綺 「……結衣ちゃん、知らないの？」

結衣 「何をっ？」

直綺 「「こがど」だか知ってるっ？」

結衣 「病院でしょ？もうさ、体調悪かったんなら

直綺 「言ってくれたら良かったのにさ、なんにも言ってくんないで」

直綺 「ちよ……ちよっと結衣ちゃん」

直綺、結衣を連れて上手にはけていく。

陽介、それを見る。

柘平 「言ってなかったんだ」

陽介 「まあね」

柘平 「でも」

陽介

「もう、そばにいてあげられないし」

熊の着ぐるみを大事そうにさわる陽介。

陽介

「そうかあ、お前、誰にも入ってもらえなかったのか」

柚子

「年季入ってるね」

陽介

「ずっと一緒だったからね。ずっと。」

これ着て、いつも風船配ってた。

そっか。お前も引退かあ……」

バックを持って、立ち上がる。

柚子

「どうするの？」

陽介

「洗ってやる」

柚子

「手伝うよ」

陽介、柚子、食堂にはけていく。

柘平、あとを追おうとして、上手に向かう。

風の音。

丘の上から汐里があらわれる。

ゆっくり空をみる。

下手から青山と子供たちがあらわれる。

青山はスケッチブックを持っている。

青山

「昔々。一人の少年がいました。」

少年は毎日、毎日、嘘をついていました」

「おおかみがきたぞ。おおかみがきたぞ」

「周りはいつも騙されていました」

「ある日、少年の嘘が本当になりました」

「おおかみがきたぞ」

「少年は必死に叫びました」

「もう誰も信じませんでした」

「少年は。狼に食べられてしまいました」

子供たちが怖がって走り回る。

青山、花壇を見つめながら、つぶやく。

青山

「僕もいつか。狼に食べられてしまうかもしれない」

汐里がゆっくりと首をふる。

さや 「ねえ、先生、続きは？ 続き」

一佳 「続きを聞かせて」

日和 「聞かせてよ」

青山 「えー続き？ 続きかあ……どうなったんだらうなあ」

青山、姫香、小春、洋弥と会釈をする。

美桜、子供たちに近寄って、話の続きをする。

美桜

「少年は狼に食べられてしまいました。」

それは少年の嘘に心がなかったからです。

もし、嘘に心があつたなら。

少年の言葉を嘘と知りながら最後まで信じ続けた人も

いたかもしれない」

一佳

「そしたら少年は？ 食べられなかった？」

さや

「信じ続けた人が食べられたかも」

日和

「難しくてわかんない」

子供たち、笑って下手へはけていく。

青山

「……おおかみがきたぞ」

上手から大塚と飯田がやってくる。

飯田

「院長、待ってください、院長……」

大塚

「青山先生……」

青山

「……はい」

大塚

「……」

木部が呼びにくる。

木部

「院長、こちらです」

大塚、飯田、木部、下手にはけていく。

それを見送る青山。

青山

「あ。これ、お渡しにきたんですよ、

皆さん、お逢いしたんですね、あの、あっちの病棟の」

小春

「水恵さんですか？」

姫香

「はい」

青山

「これ。水恵さんが今度のファッションショーについて」

小春

「なんですか？」

姫香

「(スケッチブックを開く)」

青山

「水恵さん、デザイナーになりたかったそうなんですよ。

姫香

それで、これを憧れの姫香さんに着て欲しいって話してました」

小春

「これ、今度のショーのイメージに近いかも」

小春

「そうね」

姫香

「素敵です、ありがとうございます」

小春

「使わせていただきます」

青山

「良かったです」

小春

「みにこれるのかな、水恵さん」

青山、2階の診察室を見上げる。

姫香

「先生？」

洋弥

「どうかしたんですか？」

青山

「いえ、なんでも……(テーブル上の小道具のりんごを見る)」

小春

「あ、これショーで使う小道具で、白雪姫の」

青山

「毒りんご……(ポケットからりんごを取り出す)」

姫香

「あ」

小春

「ちょっと先生、いつも持ち歩いてるんですか？」

青山

「……昔。ある患者さんの前に。りんごを置いたんです。」

姫香

「このりんご、食べますか、食べませんかって。」

小春

僕は、その時とても迷っていて

青山

僕が決めなければならぬことを。

姫香

その患者さんにゆだねてしまいました。

小春

それからですかね……ずっと……」

二階の診察室に明かりが入る。

ベッドに横たわる水恵。

椅子に座って見つめる大塚。

見守る横田と木部と飯田。

日記を開く姫香。

姫香

「今日は痛い日だ。怖い日だ。朝から検査の連続だった。今日はつらい日だった。」

あなたは私の目を見てくれない。

髪の毛がほとんどなくなってしまった。

気がつくくと、ベッドに寝てばかり。

真っ白な壁が、私の心も真っ白にする。

もう疲れた。怖い。痛い。怖い」

青山

「大丈夫。必ず、治る。必ず。治りますよ」

姫香

「あたたかく迎える場所というところを見つけた。迷っている」

青山

「僕は君を救えない」

姫香

「好きなことをして過したらいいと言われた。好きなことってなんだろう」

汐里、空を見あげる。

院長、2階から中庭を眺める。

姫香

「嘘も真実も取り払ったときに最後に残るもの」

青山

「無限の選択肢の中で、君が選んだことならば。」

美桜

僕は、無限の嘘と真実を用意しよう……。

君の心に触れることが。僕にできることならば」

「この世はたくさん言葉で溢れてる。」

たくさんのもしもと。たくさん嘘と。たくさん真実と。

そして、その中に。たくさんコロコロが溢れてる」

「嘘」

「真実」

青山

姫香

姫香、青山から、りんごを奪い、りんごをかじる。

音楽。

明かり変わり、

会場づくりをするために医療チームと、

直綺、武史、結衣、初音、秋美が出てくる。

同時に院長、診察室のカーテンを閉める。

洋弥、小春、美桜、はけていく。

青山、姫香、はけていく。

一斉に準備に取り掛かる面々。

汐里、楽しそうにそれを見ている。

【五場】(ファッションショー)

準備が終わり、席につく秋美、武史、汐里。
写真撮影をする洋弥。

横田と原川が食堂から現れる。

原川 「はあ、やっと準備終わりました」

横田 「疲れました〜」

木部 「あらっ青山先生と飯田先生は？」

横田 「なんか、小春さんに連れてかれちゃいましたけど」

台本みたいなのをもって、インカムをつけた美桜が現れる。

美桜 「原川さん、音響、照明、お願いします」

原川 「やば、緊張してきたわ」

美桜 「木部さん、横田さん、司会、よろしくお願いします！」

木部 「はいはい」

横田 「やば、私も緊張してきた」

美桜 「あ、くれぐれも、もし万が一、誰か体調悪くなったら」

木部 「任せてください」

横田 「了解です〜」

美桜 「ありがとうございます」

37

原川、片隅のブースのような場所に座る。

木部、横田、レクレーション室の方に行く。

美桜 「洋弥さん、撮影お願いします」

洋弥、うなづいて撮影位置につく。

美桜 「それでは、みなさん、始めたいと思います！」

あの

美桜、武史を見る。

武史も美桜をみる。

美桜 「……はじめます…よろしくお願いします…」

美桜、合図を出す。

音楽。

明かりが変わり、

魔女のような衣裳の小春が現れる。

あとからちよ「ちよ」と現れる鏡をもった飯田。

小春 「鏡よ、鏡〜〜〜」の世で「一番きれいなのはだあれ？」

飯田 「それは、もちろん、お妃さまです〜」

小春 「あつはつは、やっぱり〜おーっほっほっほ

2人、ストップモーション。

木部と横田が中央より、さっそうと現れる。

木部 「みなさま、ようこそいらっしゃいました！

司会進行をつとめさせていただきます木部です」

横田 「横田です！よろしくお願いたします！」

木部 「さあ、みなさん。

「「は、深い深いふかい森の中でござりますよ」

「これから、みなさんを白雪姫と七人のこびとたちの世界へ
送りいたします！」

ストップモーションがとける2人。

小春 「ふふふふふ…あたしや、世界で「一番美しいお妃じや。

「「の世で「一番美しい〜、のう、鏡っ」

「あ、やっぱり違うっ！」

「なんですってっ！」

「「の世で「一番美しいのは、白雪姫さまです〜」

小春 「な、な、なんですって〜…

わらわより美しいものは、いないぞよ〜！」

派手な効果音。

白雪姫を連想させるようなかつらをした姫香があらわれる

姫香 「きゃ〜〜〜助けて〜」

暴漢のような格好をした直綺、現れる。

直綺 「へっへっへっへ、お嬢ちゃん、どこいくんだい〜」

姫香 「きゃ〜」

木部 「さあ〜どつなる、白雪姫！ってどうか強いぞ、白雪姫！」

アクション。武史も暴漢役で加わる。

木部 「強い、強いぞ、白雪姫」
横田 「えーこれ、白雪姫が負けなきやダメなんじゃない？」
小春 「もー負けず嫌いなんだから」
木部 「仕方ありません。私がいきます」
横田 「え？」

木部が乱入して、直綺に加勢して戦う。

横田 「おーっと、形勢逆転！いやでも強いぞ白雪姫」
小春 「姫香、負けなきやはじまんないわよ！」
姫香 「……(棒読みで)きやー」

姫香、やられたふりして倒れる。

直綺、はけていく。

木部、何事もなかったかのように司会にもどる。

横田 「さあ、倒れてしまった白雪姫！白雪姫の運命はいかに！」
木部 「とそこへ、現れたのは七人の小人たち」

音楽。

下手より小人たちが現れる。

(陽介、柚子、柘平、和歌、さや、ひより、一佳)
白雪姫に気づく。

柘平 「わー、どうしたんだろー」
さや 「倒れているよ」
一佳 「助けてあげなきや〜！」
日和 「助けてあげなきや〜」
7人 「助けるぞー」

白雪姫の周りを、ただウロウロする小人たち。

姫香 「うるさいー」
7人 「わーい、起きた」
木部 「こうして、白雪姫は、小人たちに助けてもらいました」

ワイワイ騒ぎながら、7人と白雪姫さっっていく。
音楽や場面が変わるたびに、合図を出している美桜。

小春 「さあ、鏡よ、鏡。この世で一番美しいのはだあれ？」
飯田 「この世で一番美しいのは〜それは〜
白雪姫までです〜〜〜」

美桜、合図を出す。

青山、かなり戸惑いながら。

青山 「(棒読み)ど、どうしたんだい、小人たち」

一佳 「白雪姫が~~~~~!~!~!」

さや 「助けておくれ~~~~~!」

柘平 「王子様~~~~~!」

7人 「姫を助けて〜」

青山の周りに群がる小人たち。わんわん泣いている。

青山 「これはなんと美しいお姫さまだろう」

小人たち、「うん、うん」とうなづく。

青山 「僕のお嫁さんになってもらおう」

小人たち、「うん、うん」とうなづく。

青山、周りを見渡す。

全員が、ほらほらというふうに、うながしている。

青山、意を決して。

白雪姫を抱きかかえようとするが、やっぱりやめて41
注射みたいな真似をする。

木部 「なにしてんだ、王子〜!」

横田 「注射ですよ、注射」

木部 「それはわかっています」

青山 「さあ、もう大丈夫ですよ」

姫香 「あ、はい」

横田 「白雪姫は王子の注射で目を覚ましました」

姫香 「王子様、ありがとうございます」

青山 「いえ、〜」気分はどうですか」

姫香 「もうなんとも」

青山 「それはよかった」

木部 「こうして、白雪姫は王子に助けられました、

横田 「良かった、良かったですね〜!」

木部 「白雪姫は王子様と結婚する〜とになりました」

姫香 「小人さんたち、今までありがとう」

青山

「ありがとうございます」

姫香と青山は、手をつないで、さっぴていく。
小人たちは、それを見送る。

柘平

「さよーなら、白雪姫！」

柚子

「幸せになるんだよ！」

日和

「幸せになつてね！」

陽介

「りんごには気をつけるよ！」

さや

「ありがとう、白雪姫！」

和歌

「ありがとう！」

一佳

「さよなら〜」

小人たち、振り返り笑う。

小人たち

「さよなら」

小人たち、はけていく。

木部

「さて。公式発表のお話はこれでおしまい。

横田

けれど物語は続いています」

小春

「白雪姫を助けた小人たち。

木部

その続きを知りたいと思いませんか」

小春

「知りたいです」

木部

「ひとりひとりの物語は続いています」

音楽。

姫香と青山、また出てくる。

青山、恥ずかしそうに、ブースの椅子に座る。

木部と横田も司会、見守るようにブースの方に行く。

姫香、モデルウオークで、ランウェイを歩く。

花道の前まで、歩いて、振り返る。

姫香

「さあ、続きを聞かせて」

音楽。

着ぐるみの服をきて、熊五郎の頭をもって出てくる陽介。

姫香

「あなたの夢は」

陽介

「熊五郎！」

陽介、頭をかぶって、おどけて歩きます。
ポーリングして花道の先で頭をとる。
みんなをみて笑って、喋りながら花道をもどる。

陽介

「これ、凄い暑いし苦しいしおまけにくさじい
でも。」

どんなにつらい時でも悲しい時でもしんどい時でも
これをかぶると。

みんなが俺をみて、笑う。

この小さな窓から見るその風景は最高だったんだ」

陽介、ゆっくり熊の頭をかぶる。

再び歩き出そうとするが、前に進めない。

(中で悲しみがあふれだしたかのように)

中央から風船をもった、結衣が現れる。

結衣

「くまさん、泣いてるのっ。」

熊陽介、振り返る。

結衣

「はい、風船あげる。だから泣きやんで」

結衣

「(小さな窓をのぞき)むようじ」

知ってたっどんなかつこいローよりも

いつもいつも、どんなときでもそこにいてくれた、

熊五郎が、私のローなんだよ」

陽介、頭を取る。

結衣

「ずっと見守ってくれてたもんね」

陽介

「でも俺」

結衣

「(風船を渡す)」

風船を受け取る陽介。

姫香

「笑って」

陽介、結衣

「(笑ってポーズ)」

写真を撮る洋弥。

2人、わらいあつて、観覧席のなごろにいぐ。

姫香

「さあ、続きを聞かせて!!」

音楽。

柚子と初音が現れて、一緒に踊りだす。

たのしそうに踊る2人。

ランウェイを歩いて、再び、踊りだす。

途中で苦しくなってきた、倒れる柚子。

慌てる周り。

でも初音はそれに気付きながらも、踊り続ける。

柚子は、それを嬉しそうに見る。

柚子

「踊ることば、私の言葉なの。」

想いが溢れて、鼓動に響いて、

その鼓動がみんなとつながってる気がして。

踊っているときは、みんなと会話している気がして。

・私は……だんだんその言葉を失っていくけれど」

踊りきる初音。

起き上がる柚子。

柚子

「私はつながっていく」

姫香

「笑って」

柚子と初音、一緒にポーズ。

姫香

「さあ、続きを聞かせて!!」

音楽。

ヒーローに扮した直綺。

走りこんでくる。

続いて柘平。

柘平

「なんで、お前が、そんなカッコしてんだよ!!」

普通の私服で現れる柘平。

マスクを外す直綺。

直綺

「正義のヒーロー……」

柘平

「おれ、悪役かよ」

直綺

「やつつけられますか?」

僕は強いですよ(マスクをかざる)

柘平

「俺だってまだ負けねえよ」

結衣がMCが入ってきて、みずから、柘平につかまる。

結衣

「きゃー助けて〜」

さあ、みんな、レッドに力を〜」

みんな

「レッド〜」

アクション

最初は、柘平、直綺以外にも何人が加わる。

かっこいいアクションのすきに、

熊五郎でてきて、結衣をたすける。

柘平と直綺2人になる。

直綺、マスクをはずす。

2人の激しいアクション。

柘平の足があがらなくなり、ためらう直綺。

柘平

「続ける!」

直綺、柘平を倒す。

柘平、倒れる。

直綺

「兄貴」

柘平

「(笑って、なんかダメだしする)」

直綺

「兄貴、やっつけちゃってくださいよ。」

やっつけちゃえばいいですよ」

柘平

「やっば、お前馬鹿だろ」

姫香

「笑って」

柘平、直綺、ポーズ。

姫香

「続きを聞かせて」

音楽。

白いドレスの和歌。

恥ずかしそうに現れる。

和歌

「この姿はお母ちゃんに」

秋美

「和歌ちゃん、お嫁さんみたい!綺麗ね、キレイでしょ、ね、あれね、うちの娘!(写るんですを巻く)

自慢の娘なんです」

和歌、ランウェイを歩く。

和歌

「小さい頃に、いつも、何があっても歌ってくれたお母ちゃん。七つの音で、心を伝えるんだよって教えてくれました」

和歌、ギターを美桜から受け取り、弾き語りをはじめめる。歌う。

だんだん声が出なくなって、泣きだす。

秋美、かけよって、

和歌をだきしめ、背中をトントンする。

背中をトントンしながら、歌いだす秋美。

子守唄。

二人、抱き合う。

姫香

「笑って」

和歌と秋美がポーズ。

姫香

「続きを・・・」

姫香、黙ってしまう。

46

さや(声)

「続きを知りたい?」

日和(声)

「知りたい?」

一佳(声)

「聞かせてって言うって」

姫香

「続きを。。。聞かせて」

音楽。

さや(白衣)、一佳(ナース服)、日和(ナース服)にエプロンそれぞれ、ぶかぶかの制服を着ている。

姫香

「あなたの夢は?」

さ・日・一

「大人になりたい!」

3人、手を振りながら、楽しそうにランウェイを歩く。

さや

「大人って言ったたら、先生たちしかいないでしょ?」

日和

「一番、そばにいる大人だもんね」

一佳

「憧れの大人なんだから!」

青山、横田、飯田、木部、原川、顔を見合す。

姫香

「笑って」

さや、日和、一佳、ポーズ。

美桜、木部と横田にマイクを渡す。

音楽変わる。

木部

「こうして。七人の小人たちは。

それぞれの夢に向かって、歩きだしたのです」

横田

「その夢はこれで終わりではなく。

続いていきます、きつと」

姫香と七人の小人たちが、ランウェイを歩きだす。

音楽が急に止まる。

原川

「美桜さん！」

美桜が倒れている。

青山、飯田、木部、横田、駆け寄る。原川も駆け寄る。

武史、近寄っていく。

美桜

「ごめんなさい。大丈夫、大丈夫」

青山

「無理しないほうが」

美桜

「大丈夫です。ちよつと気がぬけちゃって、っっていうか、

安心したのかな、腰が抜けちゃったみたいな」

横田

「大丈夫ですか？」

美桜

「大丈夫。驚かせてしまって。ごめんなさい」

美桜、武史を見る。

美桜

「ごめん」

武史

「……」

姫香

「続きを」

美桜

「え？」

姫香

「美桜さんも。八人目の小人だもん。続きを」

美桜

「私は……」

姫香

「聞かせて」

美桜

「私……」

美桜、武史に笑いかける。

美桜

「当たり前のように結婚したの。
当たり前のように子供も出来ると想ってたんだけど、
今となっては、出来なくて良かったのかも」

美桜

「……ねえ、今日、何食べた？」

武史

「……なんだったけな」

美桜

「食べてないの。」

武史

「食べたよ、適当に」

美桜

「ちゃんと野菜も食べてよ。めんどくさがらずにちゃんと。」

ちゃんと「飯食べて、お仕事して、テレビみて、

お風呂は、ちゃんと湯船につかって。あつたまって。

歯を磨いて」

武史

「子供じゃないんだから」

美桜

「それから、ゆっくり寝て、朝起きて……まいにち。

ね。まいにち、当たり前のように」

美桜、武史の手をとる。

美桜

「あつたかいね」

武史

「うん……」

美桜

「どう伝えたらいいのか分からないの」

武史

「うん」

美桜、手をはなす。

美桜

「幸せだった。嬉しかった。楽しかった。

どの言葉も、ほんとで。でも、どの言葉も嘘みたい。

だって、全部、過去形なんだから」

武史、美桜の手をとる。

美桜

「……ちゃんと「飯たべてね、それで、それで……」

武史

「……」

姫香、日記を読む。

姫香

「あなたの辛い顔をみるのが辛かった。

だから最後まで、笑っていたかった。

あなたはもっと辛くなる。

好きな「やぎ」で「適」して「いい」言われました。

私の過ごしたい日々は、あなたとの日々。
だから、一緒に。一緒に闘ったら。
一緒に笑いあえるのかもしれない」

姫香、日記を美桜に渡す。

美桜

「痛い時には、痛いって言おう。
辛い時も、辛い顔みせるから、辛い顔みせて。
私、あきらめないから。」

あきらめないから、
大暴れするから。たぶん、わがままほうだいだから。
あなたがあきれちゃつくくらい、
いっぱいわがままいっから」

武史

「うん」

美桜

「あなたのわがままにもつきあってあげる」

武史

「うん」

美桜

「うん」

二人、笑いあう。

洋弥、写真を撮る。

姫香

「あ、ランウェイ歩いてないけど、歩くっ」

美桜

「あ、それは無理無理」

武史

「絶対、無理です」

嫌がる美桜と武史。

周りが騒ぎたてる。

木部

「では、これで…ファッションショーを終わりに…えーと」

横田

「えーと。続くー」

子供たち

「続くー」

音楽。全員、笑って大騒ぎ。

洋弥

「じゃあ、記念写真やるよ。準備して」

洋弥が、指示を出しながら、

全員が記念撮影のように集まる。

洋弥の合図のもと、全員で笑顔の写真を撮る。

(お客様には背中を向けてる)

そのままストップ。

ゆっくりと汐里。

ゆつくりと水恵。

白い服に身をつつんでいる。

汐里、水恵、見つめあって、笑う。

明かり、ゆつくり消えていく。

暗転。

【六場】(中庭)

明かりゆつくり入る。

片づけをしている横田、飯田、原川、洋弥、小春。
姫香、スケッチブックを見ている。

片づけ途中に佇んでいる青山。

テーブルに、りんご。

椅子に座ってる汐里。

ベンチに座っている水恵。

「……ようしょ」

「ようしょ」と

「ふふ。なんかいろいろやれそうな気がしてきた」

「たとえば？」

「ん？まだ全然わかんないけど、

前向きに迷ってみようかって」

「前向きにね」

「あ、写真、出来たら見せてくださいね」

「もちろん。見せに來ます。見たいんで。」

僕の撮った写真を、みんなが見ているところを見たいんで、
その顔を見に來ます」

みんな片づけをしながら笑いあう。

「ほんと、みんな楽しそうでしたもんね」

「不思議ですよね。」

同じ場所なのに、さっきまでの風景と違う気がします」

「流れてる時間も違う気がしますよ」

「違ったんですよ、きつと。」

そこにいる人たちが時間を動かしているような……

だから景色も違って見えるような」

「でも同じなのよね。たぶん、

小春

姫香

飯田

横田

原川

洋弥

原川

洋弥

小春

洋弥

小春

洋弥

小春

小春
姫香

景色からみたら、私たちだって違うんじゃない？」
「景色からみたら……。そうだね、
この庭は、ずつと、いろんな人たちを見て来てるんだもんね」

青山

青山、りんごが置いてあるテーブルのところに行く。
汐里とテーブルをはさんで、椅子に座る。
みんな青山をみる。

青山

「昔、ある患者さんに。りんごを食べるか、食べないかって
ゆだねたことがあるって話しましたよね」

姫香

「はい」

青山

「あれは……患者さんじゃなくて、僕の妻の話なんです」

姫香

「そうなんですか」

汐里、りんごを眺めながら、微笑む。

青山

「りんごを手にとって僕は、混乱しました。医者のかせに……。
いや、だからどこかで冷静な部分があって、
そして余計に混乱していった。

嘘や真実がいろいろ混ざりあって、真っ白なのか、真っ黒なのか。
なんにも見えなくなりました。
結局、なんにも。できなくなると。
(りんごをおいて、汐里を見つめる)「

51

青山

「僕は、あれでよかったのか」

汐里、微笑む。

姫香

「いいですね、おきなさま」

青山

「えっ」

姫香

「だって、いつも、これ、持ち歩いてもらって」

青山

「いや、これは」

姫香

「でも、そろそろ、食べてほしいかもしれないですよ」

青山

「食べるっ」

姫香

「嘘も真実も、食べちゃえばいいかもです。

青山

というより、先生、りんごは、食べるものですよね

青山

「笑う」

姫香

「笑う(うん、そう。食べてみなきゃ、わからない)……」

青山と姫香、笑いあう。

汐里、笑って、青山をみつめる。

姫香
飯田
姫香

「あ、そっだ、これ水恵さんのスケッチブックなんですけど」
「あ」

「これにね、書いてあるお洋服たちが
すごく素敵で、是非、今後のこととか
相談できないかなーって思ってた」

大塚院長がやってくる。
木部もあとをおって歩いている。

青山
大塚

「院長」
「……」

青山と横田、飯田、原川、顔を見合わせる。
木部がそこにいき、伝える。

大塚、ベンチに座る。
水恵、隣に座る。

大塚

「……」

水恵、大塚をじっと見つめる。

小春
横田

「あ……」
「あ、あの、ここの病院の院長です。
水恵さんの……」

姫香

「お母様ですね。」

大塚

あの、これ、水恵さんのなんですけど」

姫香

「水恵の？」

「みてください、これ」

大塚、スケッチブックを受け取り、めくる。
水恵、大塚と一緒にスケッチブックをみる。

大塚
姫香

「……」
「凄いですね、水恵さん。
素敵なデザインばかりなんです。
それで、是非、私たちと一緒に」

飯田

「あの一姫香さん、あの、水恵さんは、もう」

姫香

「……」

小春

「え？」

洋弥

「……」

木部、姫香に目で合図をする。

木部 「さきほど」

姫香 「え……」

言葉がつまる面々。

大塚 「そうですか」

大塚、空を見上げる。

大塚 「これは素敵なデザインなんですか」

小春 「：はい」

姫香 「とても。素敵です」

大塚 「そうですか」

大塚、スケッチブックを姫香に渡す。

微笑む水恵。

大塚 「よかったら、是非、つかってやってください」

大塚、また空を見る。

大塚 「そつ……そつですか」

大塚、ゆっくりと立ち上がり、歩きだす。

青山 「院長」

大塚 「……」

青山 「(りんご)をさしだす」

大塚、りんごを受け取って、はけていく。

水恵、笑って、見送る。

木部 「では、私も行きます」

青山 「ああ」

横田 「また、お待ちしてますね、ほら、飯田先生、
もたもたしないで」

飯田 「えー」

木部、横田、飯田、

院長のあとをおうよううにはけていく。

姫香・美桜

「私は。弱い」

一佳と日和が丘の上に駆けこんでくる。

一佳

「けれど生まれた」

日和

「限りある命の中」

一佳

「限りある時間の中」

美桜

「限りある出逢いの中、今、あなたと出逢った」

姫香

「もしも。」

今日、私がいなくなっても

美桜

「明日は必ず訪れる。私は嬉しく思う。」

世界は変わらず」「にあると」「とを」「を」

全員

「」「私がいたと」「とを」

姫香

「無限に広がる「」は。」

いつまでもあなたを描くだろう」

美桜、姫香に日記を渡す。

姫香、劇場奥扉方向に歩きます。
歩きだしてたちどまり、振り返る。

美桜

「おやすみなさい」

汐里

「おやすみなさい」

一佳・日和・水恵

「おやすみなさい」

姫香

「おやすみなさい」

姫香、はけていく。

残された5人、ゆっくりと眠りにつく。
明かり、それぞれを包み込むように、
ゆっくりと消えてゆく。

暗転。

【エピソード】

音楽。

病院の日常。

青山、飯田、木部、横田、原川。

いつもの風景。

車椅子にのった陽介、結衣に押されてやってくる。さや、ぬいぐるみを抱えて寂しそうにやってくる。

直綺、初音、秋美、武史、訪れる。

小春、洋弥、姫香も合流してみんなでアルバムを見る。

アルバムを楽しそうに見る面々。

大塚院長がやってくる。

姫香、スケッチブックを院長に渡す。

56

既になくなったものたちが、

微笑み、見つめて、やがて、ゆっくりはけていく。

そして日常がながれていく。

おしまい

ありがとうございました。